大学教育における「アカデミック・ジャパニーズ」を考える

森　　朋　子

1　はじめに

“Academic Japanese”（アカデミック・ジャパニーズ）は，本来「研究のための日本語」「学術的日本語」を指すが，それが「日本の大学での勉学に対応できる日本語力」という意味で使われるようになったのは，2002 年より実施されている日本留学試験の「日本語シラバス」に謳われてからである。

勿論それ以前も，各大学において学部留学生のための日本語教育が実施され，教材も開発されてきたわけだが,「大学における日本語能力」に対し,「アカデミック・ジャパニーズ」という限定的な名称が冠されたことで，その意味するところを明確にしようとする議論が生じてきた。言い換えれば，現在は，アカデミック・ジャパニーズが具体的に示す能力とは何か，またその能力の養成のために何をどう教えるべきかについて，基本的な共通理解が模索されている段階といえる。

そこで，筆者も大学における学部留学生のための日本語教育に携わる者として,「アカデミック・ジャパニーズ」のあるべき姿について迫っていきたいと思う。本稿では,アカデミック・ジャパニーズとは何かという基本概念の構築を試みていく。

2　日本留学試験におけるアカデミック・ジャパニーズの定義

まずは,「アカデミック・ジャパニーズ」という名称が日本留学試験において，どのように定義されているかを確認しておこう。

2.1　日本留学試験とは

日本留学試験は，日本への留学希望者を対象に 2002 年より実施されている試験である。

それ以前，留学希望者の入学選考のための試験としては，日本語能力試験，私費外国人留学生統一試験があったが，日本への留学手続きが複雑であることから，欧米同様，渡日前入学許可を実現すべく，新たに開発された。

試験は,「日本語」「総合科目」「数学」「理科」の 4 科目であり，このうち日本語は「聴解」「聴読解」「読解」及び「論述」で構成されている。

2.2　アカデミック・ジャパニーズの定義

日本留学試験において,「アカデミック・ジャパニーズ」という名称が現れたのは,『「日本留学のための新たな試験」について–渡日前入学許可の実現に向けて』（報告書）の「試験の目的」の項であった。そこで述べられているアカデミック・ジャパニーズの定義が，あいまいでわかりにくいという指摘は，既に複数の研究者によってなされているが，ここでは改めて検証を加えていきたい。

「試験の目的」で記載されたアカデミック・ジャパニーズの定義は以下の通りである。

> この試験は，外国人留学生として日本の等教育機関，特に大学学部に留学を希望する者が，日本の大学での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）をどの程度習得しているかをシングルスケールで測定することを目的とする（調査研究協力者会議, 2000）。

これによると，アカデミック・ジャパニーズとは「日本の大学での勉学に対応できる日本語能力」ということになるが，具体的にはどのような能力

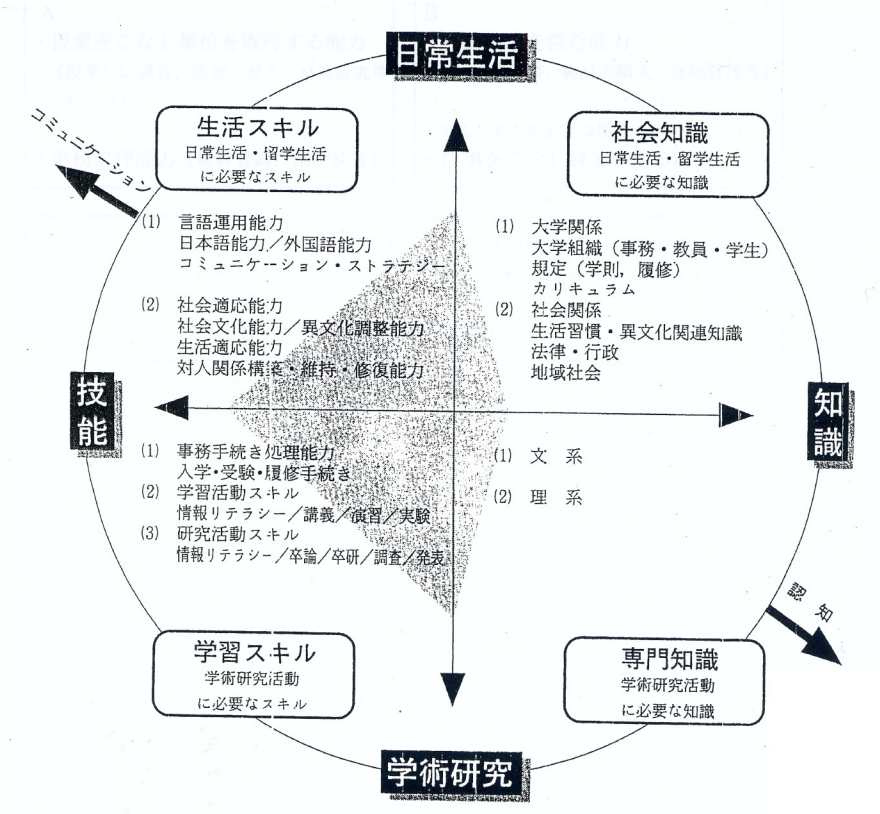
人文学部日本文化学科

を想定しているかという記述はなく，以下の「日本語シラバス」の「測定対象能力」の記述と図にヒントを求めることになる。

> この試験が図ろうとするする能力は，下記概念図の網掛け部分である。
>
> この試験は，単に日本語に関する知識の有無や知識の量を測定するアチーブメント・テストではない。また，日本での生活能力があるかを測る人格テストでもない。
>
> この試験は，日本での留学生活をおくる上で，日本語によるコミュニケーション能力があるかどうか，また，自国での初等・中等教育修了までに習得した知識を前提としながら，日本の大学での学習・研究活動を行うための日本語能力があるかどうかを測定する言語テストであり，かつ，標準テストである（調査研究協力者会議，2000）。

しかし，この概念図は，三宅和子が「標題が記されていないため，この図全体が何をさすのか正確にはわからない」と指摘し，ここでいう「アカデミック・ジャパニーズで何が目指されているのかを明確に把握することが難しい」と述べている(2003)ように，ここからアカデミック・ジャパニーズの具体的なイメージは掴みにくい。

日本留学試験が「日本の大学での勉学に対応できる日本語力（アカデミック・ジャパニーズ）」（下線筆者）を測るものだとすれば，図の網掛け部分が，試験が定義するところの「アカデミック・ジャパニーズ」ということになり，主に半分を「生活スキル」，残り半分を「学習スキル」と定義していることになる。つまり，「大学での勉学に対応できる日本語力」の半分を「生活スキル」＝日本で生活していくために必要な能力と位置づけているわけだが，この点について門倉正美は「生活スキル」と「学習スキル」が等価で扱われている点は



（調査研究協力者会議，2000）

問題であると指摘している。更に門倉は,「事務手続き処理能力」が「学習スキル」に含まれている点にも疑問を投げかけており（2003），区分分けの正確さにも問題が残る。

説明文との関連性においても,「日本での生活能力があるかを測る人格テストではない」と述べられている内容が，図中の「生活スキル」と全く無関係といえるのか，また「日本での留学生活をおくる上で，日本語によるコミュニケーション能力があるかどうか」という記述が，図中では「コミュニケーション･ストラテジー」を指すのか,「社会適応能力」を指すのか，あるいはその両方なのか，別のものを指すのか，説明文と図のつながりも見えにくい。

また,それに続く「試験が想定する課題の類型」においても,「課題とは，日本に留学するに当たって，あるいは，日本の大学に入学後に直面する現実的な諸課題の総称である」として，以下の 8 項目が挙げられているが，内容は抽象的であり，大学生活の中で求められるどのような具体的なタスクを想定しているのかは明確ではない。

1．指示を実行する。
2．事物を特定する。
3．事物を描写する。
4．事物を比較・配列する。
5．物事の推移・展開を予測する。
6．物事の背景や意図を把握する。
7．物事を構造化し，法則性を発見する。
8．その他（調査研究協力者会議，2000）

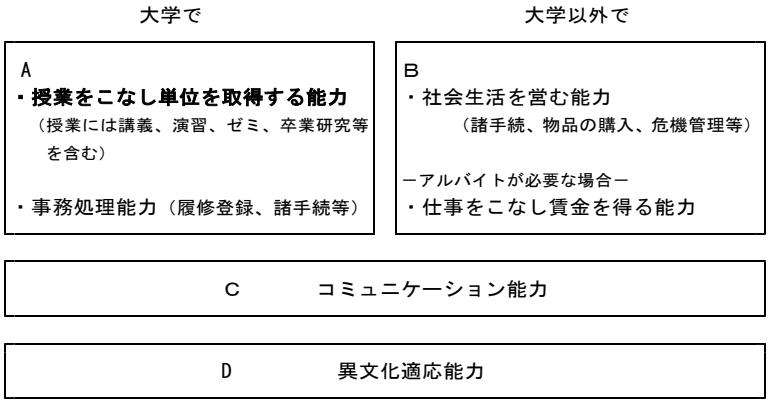
つまり,日本留学試験では,「アカデミック･ジャパニーズ」という名称を用いることにより,「大学教育における留学生の日本語能力」を日本語教育の中のひとつの領域として特化したことに成功したが，その内容については，結果的に「問題提起」にとどまり,その後の議論を呼ぶこととなった。

大学入学後に必要な日本語能力がアカデミック・ジャパニーズであり，日本留学試験の目的がそれを測るものだとすれば，前提であるべきの定義が曖昧であることは問題であるが，本稿の目的は日本留学試験のあり方を論ずることではないので，ここではその問題には言及しない。

3　学部留学生が必要とする能力

さて，アカデミック・ジャパニーズとは何かを考える前提として，大学に入学した学部留学生が,目標（卒業）を達成するするまでために，どのような能力が必要となるかを考えてみよう。図 1 は,その能力を大きく捉えて図式化したものである。

学部留学生といっても,国費,私費の別をはじめ,専攻や大学の受け入れ体制によって条件が異なるが，多くの場合は，これらの能力を「日本語を駆使して実行できる」ことにより，安定し充実した



＜図１　卒業のために学部留学生に必要な能力＞

留学生活を送り，目標達成が可能になると考えられよう。

４　アカデミック・ジャパニーズとは何か

それでは，「留学を全うするために必要な総合的な日本語能力」と「アカデミック・ジャパニーズ」の関係について考察していこう。

日本留学試験の定義においては，「生活スキル」として基本的な日本語能力および社会適応能力，「学習スキル」として事務手続き処理能力も「アカデミック・ジャパニーズ」の範囲に含まれていることは前述した通りだが，果たして「アカデミック・ジャパニーズ」とは，留学生活を送るための日本語の総合力を指すべきものなのであろうか。

図１に話を戻すと，ＡからＤまでの４つの枠組みの中で，留学生であるからこそ必要な能力といえるのはＡのみで，ＢからＤ，何らかの目的を持って来日した外国人が，快適に日本での居住生活を送るために共通して必要な能力ということができる。留学を全うするには，ＡからＤの総合力が必要であるが，その全てが，大学教育を受ける者だけが必要とする特化された能力ではない。

日本留学試験は，大学入学希望者のための選考試験であり，留学のための日本語の総合力を測ろうとすることは不自然ではないが，それは「日本で大学生活を送る上で必要な日本語力」と呼ぶべきもので，「アカデミック・ジャパニーズ」という名称を使うことは，”Academic Japanese”の本来の意味からもかけ離れてしまうのではないだろうか。

それでは，図１のＡの部分「授業をこなし単位を取得する能力」と「事務処理能力」がアカデミック・ジャパニーズなのであろうか。

「学部留学生のための日本語教育が何の習得を目指して行われるべきか」という視点で考えた場合，「授業をこなし単位を取得する能力」と「事務処理能力」は，質的に大きく異なる。前者は体系的教育が有益な技能であり，後者は体験の中で自然習得が可能な場合が多い。大学で行われる履修登録，諸手続，クラスメイトとの語らい等は，キャンパス・ジャパニーズと呼ぶべきものであり，アカデミック・ジャパニーズとは区別する必要がある。

従って，大学教育におけるアカデミック・ジャパニーズは，留学生が，単位取得のために必要とする技能に限定された日本語能力と位置づけることができよう。具体的な技能もあわせて図２に示す。

アカデミック・ジャパニーズ

授業をこなし単位を取得することができる日本語能力
（授業は、講義、演習、ゼミ、卒業研究等を含む）

キャンパス・ジャパニーズ

・事務処理をするための日本語能力
・教職員、友人とコミュニケーションをとるための日本語能力

具体的な技能
・講義・演習を聞く
・ノートを取る
・教科書、プリントを読む
・文献を調べる
・文献を読む
・レポートを作成する
・口頭発表をする
（・作品を作る）
（・実験をする）

＜図２　大学で留学生が必要とする日本語＞

さて，アカデミック・ジャパニーズとは何か，どうあるべきかという輪郭を明確にしようとする試みは，各大学で行われている。以下に東京外国語大学と立命館アジア太平洋大学の例を挙げる。

A　横田淳子（東京外国語大学　留学生日本語教育センター）（2004）

アカデミック・ジャパニーズとは何か「大学での授業に密接に結びついた日本語，またはその日本語力」

具体的な技能：

講義や発表を聴く
質問する／発表する
教科書や参考文献を読む
レポートや答案を書く

B　山本富美子（立命館アジア太平洋大学）（2004）

アカデミック・ジャパニーズ「大学・大学院等での学術分野のみならず，卒業後の職業生活や社会生活で営まれる知的活動を通して使用される高度な日本語」

A の横田は，アカデミック・ジャパニーズを大学在学中に必要な日本語能力，B の山本は卒業後の知的活動にまで幅を持たせている点に違いはあるが，いずれも在学中の「キャンパス・ジャパニーズ」「生活のための日本語」は含まず，「学習・研究のための日本語，日本語能力」に限定しているところは共通している。

また，佐藤政光は，学部教育でのアカデミック・ジャパニーズについて，次の様な考え方を示している。

1) アカデミック・ジャパニーズを独立した言語能力と見ることには無理がある。
2) 学部の教養教育では，論理力，判断力，表現力，そして，それらを統合した問題解決能力が求められている。
3) 学部教育との関連で言えば，アカデミック・ジャパニーズは，学部の教養教育が目指す内容（論理力，判断力，表現力）が日本語によって実現されることであると考える。これが実現されれば，（一般的な語彙や知識を身につけておく必要は勿論あるが）専門課程での問題はほぼ解決できるものと考える。
4) 上記 3) の内容が実現されるためには，学部での日本語教育を単なる語学教育として位置づけるのではなく，学部教育の目指す内容の日本語による訓練という面を意識して行う必要があると思われる。具体的な授業内容は，読み書き，プレゼンテーション，ディスカッションということになり，学部の一般の授業と形式的に類似するところが多いが，日本語の授業では留学生に対してフィードバックがなされるという点で大きな意味と効果がある (2004) 。

佐藤は，1) で「アカデミック・ジャパニーズを独立した言語能力と見ることには無理がある」と述べているが，これまで述べてきたように大学教育における「アカデミック・ジャパニーズ」という特定の領域は確立し得ると思う。また，アカデミック・ジャパニーズという特定領域が確立することで，学部留学生に何をどう教えていくべきかを議論する上で，前提となる共通理解を持てるという側面も軽視できない。

しかし，大学での日本語教育までもを「アカデミック・ジャパニーズ」と呼ぶことには違和感がある。正確には「アカデミック・ジャパニーズ（を養成するための）教育」と呼ぶべきであろう。

アカデミック・ジャパニーズ教育をどのように実施するかは，今後更に議論されるべき課題であるが，佐藤の「学部での日本語教育を単なる語学教育として位置づけるのではなく，学部教育の目指す内容の日本語による訓練という面を意識して行う必要がある」という指摘は，大変示唆に富んでいる。

5　今後の課題

以上，アカデミック・ジャパニーズの定義について考察し，本稿では「大学において授業（講義，演習，ゼミ，卒業研究等）をこなし単位を取得することができる日本語能力」と位置づけた。アカデミック・ジャパニーズを養成するための教育は，「アカデミック・ジャパニーズ教育」と区別して

いく。

今後は，アカデミック・ジャパニーズのために必要な技能について，具体的な下位技能を明確にした上で，アカデミック・ジャパニーズ教育をどのようにしていくかについて検討を加え，シラバス構築へとつなげていきたい。

＜参考文献＞

(1) 門倉正美（2003）「アカデミック・ジャパニーズとは何か」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ　日本留学試験が日に及ぼす影響に関する調査・研究－国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに－』平成 14 ～ 16 年度科学研究費補助金基盤研究費中間報告書

(2) 佐藤政光 (2004)「学部教育におけるアカデミック・ジャパニーズを考える」東京外国語大学留学生日本語教育センター移転記念シンポジウム「アカデミック・ジャパニーズを考える」資料

(3) 調査研究協力者会議（2000）『「日本留学のための新たな試験」について－渡日前入学許可の実現に向けて』

(4) 三宅和子（2003）「留学生・日本人大学生のアカデミック・ジャパニーズとは」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ　日本留学試験が日に及ぼす影響に関する調査・研究－国内外の大学入学前日本語予備教育と大学日本語教育の連携のもとに－』平成 14 ～ 16 年度科学研究費補助金基盤研究費（A）(1) 中間報告書

(5) 山本富美子（2004）「アカデミック・ジャパニーズに求められる能力とは－論理的・分析的・批判的思考法と語彙知識をめぐって－」東京外国語大学留学生日本語教育センター移転記念シンポジウム「アカデミック・ジャパニーズを考える」資料

(6) 横田淳子（2004）「アカデミック・ジャパニーズを考える」東京外国語大学留学生日本語教育センター移転記念シンポジウム「アカデミック・ジャパニーズを考える」資料